東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2007 年 **2** 月 **23** 日

死

クルアーンは、「誰でも皆死を味わうのである。」（イムラーン家章第１８５節）という句によって、死が、逃れることのできない事実であることを思い起こさせます。この句の意義は、既知の事実を繰り返すことではなく、死に対し備えるよう、警告を与えることでしょう、預言者ムハンマドは次のようにおっしゃられました。「快楽を消し去ってしまう死を、よく想念しなさい。」別のハディースでは、墓にいる人々を思い起こすよう求められています。「死と、死後には骨も体も腐ってしまうことを思い起こしなさい。来世を求める者は、現世での装飾を放棄する。」

ムスリムの皆様。死を、無になること、終焉を迎えることと見なす人は、生の意味をも知ってはいないのです。そういう人にとって生とは、適当な玩具のようなものです。墓場とは闇に続く扉であり、人の最期とは、愛する者との、二度と出会うこともない、別離のようなものです。可能な限り、その生活から死を追放しようとします。死を思い起こす全てのものから遠ざかっていようとします。このために、来世を信じない人の魂は、苦痛の中にあるのです。このような人にとって何が慰めになり得るでしょうか。人がその死後は一掴みの土になってしまう、ということを考えるのは、無情なことではないでしょうか。人は死後、与えられていた恵みや、託されていた信託などによって審判を受け、報奨もしくは罰を受けるため、天国もしくは地獄へと送られるのです。

近代化した都市では、墓場は、人を不快にしない程、遠くに造られるようになりました。墓の中を天国の庭とすることを考えられない人たちは、墓を記念碑のように飾り立てます。墓地への訪問はそこに眠る死者のためではなく、訪問者が警告を受け取ること、死を思い起こすために合法とされているということを認識しておくことも意義があるでしょう。タウヒードの信条を損なう振舞いをしないという条件下において、墓を訪問することは人に来世を認識されるものとなります。

大切な兄弟姉妹の皆様。死に関する憎悪を帯びた言葉については、地獄を恐れるようにそれを遠ざける必要があることを忘れてはいけません。死の天使であるという理由でアズラーイールを非難すること、鎌を手にしたような醜い絵にしたてることは、ムスリムにはふさわしくない行為です。「アズラーイールは彼の命を誤ったところで奪った。」とか、「彼は今アズラーイールと戦っている。」といったような言葉は、ムスリムが決して口にしてはいけないものです。

ムスリムの皆様。死は、遺された人々にとって悲しみと追慕に満ちた出来事ではあっても、信仰する人々にとっては、一時的なところから永遠への移動を成し遂げさせる手段なのです。だから多くの章句で、死や来世が、「出会う」という意味である「リカー」（リカーウッラーフ・リカーアーヒラ）という語で表現されているのです。真の生が二つめの世界で始まることを信じる人たちは、死を、恐ろしく逃れるべき、終わりの始まりとしてではなく、無限の始まりとして見なすのです。

そう、死の天使は私たちをどこで待っているかわかりません。だから私たちが、あらゆる場所でそれを待っていましょう。この聖なる旅路への用意ができていますか？昨日食べたおいしい料理、昨日過ごした楽しい時間は、今日には何の価値もありません。明日に残るのはただ善行、もしくは罪です。アッラーが皆様にこの意識を与えられることを願い、今日のホトバを次の章句で締めくくりたいと思います。「あなたがた信仰する者よ、アッラーを畏れなさい。明日のために何をしたか、それぞれ考えなさい。そしてアッラーを畏れなさい。本当にアッラーは、あなたがたの行うことに通暁なされる。」（集合章第１８節）